

## 講演「実体験、実感、共感を通して命の大切さを」

杉田 洋

### 1 はじめに

ご紹介いただきました文部科学省の杉田でございます。本日は、とても気持ちがあたたくなる会に参加させていただきありがとうございました。また、全国からこのようにたくさんの方々にお集まりいただき、学校動物飼育への熱い思いをもっていただく方が多くいらっしゃることを感じました。

私は、学校動物飼育に対する私なりの考え方をもちていますが、今日の事例発表で様々な立場からのご発表を聞き、自分の考えをさらに広げることができたいへんに有意義であったと感じました。

残念なことに、現在はこのような活動が、学校現場になかなか位置づけられていない状況があり、皆さんの情熱によって一歩一歩前に進めていただいているのが現状だということです。これからは、このような活動をどのように発信し、広げていくか、学校動物飼育に関連する様々な教育をどのように束ねていくかということが、これからの課題であると思います。

### 2 母の死を通して感じたこと

私事ですが、昨年母を亡くしました。そのことで、仕事に力が入らないくらいのショックを受け、自分にとってどれだけ重い命であったかを実感させられました。母は、生きたくて、生きたくて、その願いがかなわないという中で病と戦っていました。その姿を間近で見ていることもあって、特に「せつなさ」のような思いが強かったのだと思います。私には子どもが3人います。この一連の時を一緒に過ごして、子どもたちがどれだけ実感したかわかりませんが、きっと大きな心の動きがあったのではないかと思います。一時、学校に行くとは出て行って、しかし学校へは行かず、病院に行って私の母の手を握りながら話をしていたということがありました。私は母からそれを後から聞いて知ったのですが、叱ることはできませんでした。残された命の重さを感じたからこそその行動だったからだと思ったからです。

私が母を亡くしたときに感じたそのむなしくせつない心の動きというのは、以前、高校時代に友人を亡くしたときと似たような感覚でし



た。さらに遡ってみると、小学生の時、縁日で売っていたひよこを買ってもらって、親鳥になるまで育てていたのですが、そのニトリが死んだときの感覚にも似ています。おそらく、ひよこを飼いたいと思ったきっかけは、そのときの学級担任の先生が生き物をよく教室に持ち込んで飼育をしていたので、その影響を受けたのだと思います。小学校時代においては、ほとんどの時間を一緒に過ごす先生の姿勢は、子どもたちに大きな影響を与えるのです。

私は、少なくとも、動物や生きものに深い愛情をもち、思いやれる子どもは、人間にも同じような感情をもつことができるのではないかと思います。また、動物の飼育には、心が歪んでしまったような子どもも無条件に心を開くということがあり、動物飼育を積極的に教育の対象として学校教育に取り入れる意義があると思っています。

### 3 なぜ、実体験、実感なのか

さて、今日の演題を「実体験、実感、共感を通して命の大切さを」としました。国の方でも、命の大切にする心をはぐくむ教育については重要視をしています。神戸の事件以来、緊急アピールを出すなどして、学校にも相当そのメッセージは伝わっているはずですが、しかしまた、佐世保でもあのような事件が起き、ちょっと学校教育の限界のようなものも感じています。果たして、このようなことについて学校は無力なのでしょうか。現在でも、中教審において、心の教育も含めて広く検討していますが、「命の大

切さ」についても重要な課題の一つになっています。

心の教育が難しいのは、言葉だけでは教えることができないからではないでしょうか。それで、「実体験、実感」ということをキーワードを演題にしたのです。この実体験、実感の中心的な活動内容として、学校飼育動物があると考えています。

命を大切にするという事は、人間にとっていわば当たり前のことです。しかし、今の子どもたちの中には、その当たり前がわからない子どもがいるのです。生活科が導入されたとき、ザリガニやウサギの飼育をした際に、「学力重視の時代にこのようなことは学校ですることなのか。」という保護者の批判もありました。確かに、昔は、地域の遊びや家庭での飼育活動などを通してそのようなことを学んだのかもしれませんが、しかし現在は、長崎での調査において、「死んだ命が生き返る」とあれだけの数の子どもが答える現状を考えると、「命の教育」も学校でしなければならない時代になったと覚悟をする必要があります。本研究会の取組は、その延長線上にある課題です。

NIHKに「みんな生きている」という生命教育を意識した番組があります。これは、教材として使えるように15分間でまとめられ1年間様々な話題を取り上げますが、その中で必ず動物の問題を取り上げています。先日の編集会議では、さらに人間の死も取り上げられないかということから、余命幾ばくもない方に取材をお願いして、その家族の心の動きをドキュメンタリーとしてまとめるというアイデアがでされました。しかし、このような取材の受け手がいないので難しいとも言っていました。なぜこのような考えになるかといえば、少なくともパッチャルでない、リアリティーのある番組でなければ訴えかけが弱いという思いがあるからです。そして、「死」ということをぬきにして、生命の大切さを実感させることはできないという考えるからです。身近な生死の実体験から命の大切さを実感し共感させる上で、特に小学校の時代において、学校において小動物や生きものを飼育することがたいへん重要な体験の機会になっているのだと思います。

#### 4 学校における動物飼育支援するための支援

私が以前勤めていた地域で、ある小学校の教頭先生が、飼育がとてもたいへんということか

ら、飼っていたウサギを埋めてしまったということが大きな問題になりました。そのときに教育委員会は、中川先生の援助を受けて、獣医師会との連携をとりながら学校を支援する仕組みをつくりました。このことが、今、すっかりと定着してきています。学校において動物飼育を行っているところはたくさんあります。しかし、それはただ行うだけでなく、それを教育の問題として考え、成果が上がるようにしていくことが大切だということです。そのためには、行政による学校への支援が大切なことだと感じました。その際に、各地の獣医師会の協力を得られるようにすることが大切だと思います。現在、このような取組が全国各地で地道に行われ、少しずつ広がっていることは、望ましいことだと思います。

#### 5 学校生活に根付いた動物飼育を

最近、動物園等に行って「動物との触れ合い」を行ったから「命の教育だ」とおっしゃる方がありますが、このような一過性の取組では、「命の尊さや重さ」は実感をしにくいと思っています。大切なことは、子どもたちが、継続して飼育する中で、「育て親」のような気持ちになって動物等に愛情を感じられるようにすることです。そのためには、学校飼育動物をいかに教育の対象として考えて、そこに教師がどのように関わっていくかということがとても重要な鍵になります。

特別活動の担当調査官として動物飼育について考えてみたいと思います。特別活動は、子どもたちの学校生活を教育の対象としています。学校は、もともと子どもたちにとって、学習する場であると同時に生活する場でもあります。その生活の場を教育の対象としていることが特別活動の一つの特徴です。また、集団生活の中で、人間的な触れ合いのある体験活動を通して共に生きていくということを学ぶ領域です。共に生きるということは、飼育する動物もその一員として考えられるということです。

そう考えた場合、先ほどの川崎の先生からご提案があったとおり、通常に動物を飼っているだけでは、命の大切さを実感することは難しいと思いますが、病気だとか怪我だとか、逃げ出したりだとかのピンチがあったときにチャンスでもあるわけです。特別活動の一つに学級生活の諸問題の解決のために話し合う「学級会」という活動がありますが、その中で、少なくとも、

そのようなピンチになったときにその問題を学級生活の問題として先生が取り上げるかどうか大きいことだと思います。みんなが真剣になって、自分たちが飼育している生き物の命の重さについて考え、自分たちにとってこの生き物の存在は何だったのかということを実感する機会にもなるでしょう。このような活動を通して、命の重さや尊さを実感させたいものです。

例えば、飼育活動を学級での活動ではなく学校の活動として考えた場合は、学級会ではなく児童会の活動になるわけです。ある学校では、チャボが学校にもらわれてきたときに、子どもたちの発案で、学校をあげてチャボの入学式をしてあげています。これを学級で考えれば、飼育している動物の誕生会をやってあげたりなど、いろいろな取組が考えられるのだと思います。大切なことは、子どもたちが共に生活をしている動物への愛着がもてるようにすることです。

ある学校では、捨て猫を学校で飼うようになっていたのですが、その猫が交通事故で足を怪我してしまっただけです。そこで、校長先生が獣医さんに相談されて診ていただいたら、すぐに命に関わることはないけれども、このままでは歩行が困難になり、やがては命の危険もあると言われたそうです。それを子どもたちに相談したわけですが、子どもたちは、何とか猫を助けてあげられないかと真剣に知恵を出し合い、話し合いをしました。その際、「みんなでお金を持ち寄ったらどうか。」や「募金をしたらどうか」という意見もでしたが、先生方はこれを教育の問題として考えさせるために、別の方法でと助言しました。そして、最終的には、校庭にある大きな銀杏の木から落ちたぎんなんを1kg千円で売って、治療のための資金を得たということでした。子どもたちは、自分たちの具体的な労働を通して、ねこを助けることにしたのです。「心は目に見えないのですが、心遣いは見えるのです。」考えや感じたことを形や言動などで表現したときに、その心が見えてくるわけです。そう考えたとき、自分自身の行動を通して、命の重さを実感することは、極めて重要な体験だと思います。その小学校では、ぎんなん拾いで3万円集まったそうです。検査料と手術料を合わせて3万5千円ほどかかったので、結果的には金額が足りなかったようです。不足した分は校長先生がお支払いになったわけです。しかし、校長先生は甘くありませんでし

た。翌年の銀杏の取入から不足分はきちっといただくとおっしゃっていました。

## 6 学校動物飼育と学校力教師力

学校の中では、動物飼育をしているとこのようなドラマがたくさん起こるのですが、それが教育の問題としてとらえられていなかったり、ただ見過ごされたりしてしまっている現状もあるのではないかと思います。大切なのは、学校としての考え方、教師の意識、価値観、センスなどです。つまり、学校動物飼育に対する学校力や教師力が問題なのです。

その意味では、学校動物飼育について共通のねらいを理解し、統一したシステムなどを作っておくことが大切です。特に、各教科等の学習の年間指導計画に位置づけてどの教師も共通に指導していくことが大切です。これは、学校力を高める一つです。

また、それと同時に、教師としてのかかわりか方や指導力も学び合う必要があります。先ほど提案があった動物飼育に関する研修を一齐に行うなどの取組は、そういう意味でもとても重要な視点であると思います。これは、教師力を高める手だての一つです。

学校で動物を飼うと言ったときには、放っておいても動物が大好きな子もいるし、根っから動物嫌いの子もいるなど個人差がたいへん大きいのです。特に動物嫌いの子どもに対してどうしたらよいかということは一つの大きな課題なのです。そのほか、動物アレルギーの問題や感染症などの病気への注意なども大切な教師力の一つです。

その際にたいせつなのが「共感」だと思っています。感受性の強く心のあたたかい子どもに、そうでない子にも共感させていく体験が大切なので、教師がそのような指導の視点をもっていなければならないのです。

## 7 どの子にも共感させるために

あるとき、クラスで飼っていたハムスターが弱ってきて今にも死にそうになったとき、先生がハムスターに「何か言っておきたい、声をかけてあげたい」という気持ちを子どもたちから引き出していました。そして、まさに子どもたちがハムスターに呼びかけている場面に出くわしたのです。私の心もすぐに動きました。それだけ子どもたちの心からの叫びが響いたからです。それを5～6分ほど続けていて、やがて涙

ながらの呼びかけに変わっていきました。最近はそのようなときに流す涙を馬鹿にするような風潮が子どもたちの中にありますが、その場では、最初薄ら笑いを浮かべていたような子どもたちの表情が変わっていくのがわかりました。そして、周り子どもたちも次第に涙を流しはじめました。そして、ある子が、「先生、この子も泣いているよ。」と言うのです。見たら、動物の日からも涙が、偶然かどうかわかりませんが流れていたんです。きっと、気持ちが通じたのではないかと子どもたちは口々に言っていました。みんなが「命の重さ、尊さ」に共感した瞬間でした。このようなことは、作文などでは得られないことだと思います。「実感」させることは、とても難しいことではあると思いますが、体験を通して、このような思いを耕していくことが、教師の役割なのだと思います。

かわいがっていた身近な動物の死は、指導がよければ間違いなく「命の教育」になります。大切なのは、そこに大切な命を共感させられるかどうかです。その第一歩は、動物を私たちの学級の一員であるという感覚を育てるということです。ぬくもりがある小動物であれば、特にこのような気持ちが持たせやすいのだと思います。では、そうでない生き物の場合どうでしょうか。

私が3年生をもったとき、ドジョウを飼っていました。こういう動物にも愛情がわくものかと見ていましたが、子どもたちは、それは可愛がっていました。子どもたちは、みんなに可愛がってほしいから、名前を付けたいと言い、4・5分間の話し合いによって3匹に名前を付けました。考えてみれば、どの名前でもなければいけないということはありませんので、賛成や反対の意見は出にくいんですが、それぞれの特徴をとらえて、それなりの名前を付けました。そして、生きもの係の子は、エサをあげるときに名前を呼びながら与えていました。しかし、そのうち誰もその名前では呼ばなくなりました。3匹がほとんど見分けがつかなくなってしまったの

です。それでも、一生懸命育てていることから、「かわいらしさ」や「命」を感じることはできるのだと思いました。

## 8 心の教育の重視と学校動物飼育

今、教育課程の基準の改訂のための審議が進んでいます。その中心は課題は、PISA調査の結果に端を発して、学力の重視です。昨年10月の中教審答申においては、世界最高水準の義務教育の実現を目指すことが示されました。また、沖縄から北海道まで、日本のどこにいても知・徳・体のバランスの取れた質の高い教育を受けさせるべきという意味のことも述べられています。このことは、言い換えれば、知・徳・体のどれが欠けても、世界最高水準の義務教育は実現しないということです。今、とすると学力向上のために、心が軽く扱われているような傾向もありますが、学力の向上と同等の情熱をもって、心の教育にも当たるということを学校も教育委員会もしっかりと受けとめる必要があります。学校動物飼育の充実、教育化ということは、その延長線上にある課題です。

## 9 おわりに

今日ここにお集まりの先生方は、学校での動物飼育を通して心を育てる重要性を認識し、それぞれに手法や工夫をお持ちだと思います。それらの情報を交換して、互いのよさを取り入れていただき、今日のおみやげとして、自分として今後新たに取り組む課題を何か一つでもお持ち帰りいただき期待とします。そして、それぞれの立場で具体的に行動を起こしていただきたいとします。

国においても、道徳教育の心のノートを改訂する際に、「命の教育」のページに、学校で子どもが動物を飼育している写真を掲載するなど、動物飼育における命の教育については、いろいろと考えているところです。私も自分としてどうすべきかを考えて、これからできることをしていきたいとします。

(文部科学省初等中等教育局教科調査官)

